

地域福祉活動職員の

まなこ

地域福祉活動推進のために

No.99

2026年 3月発行 福岡県地域福祉活動職員連絡会



地域共生社会の実現を目指して、 多文化共生やまだ見ぬ課題に対して 社協ができること

- ☆とき 令和7年9月19日(金)
- ☆ところ クローバープラザ 501研修室
- ☆参加者 県内社協職員18名
社会福祉士実習生3名

本研修会は、各市区町村社協や行政などで実践している在住外国人支援の取組みや課題について共有し、今後求められる多文化共生の新たな支援のアプローチについて協議することを目的に開催しました。

研修前半では、実践報告者として、東京都豊島区民社会福祉協議会 共生社会課課長 田中慎吾氏を講師にお迎えし、多文化共生に関する先進的な取り組み「としまる」の内容を中心にお話しいただきました。

「としまる」で実施しているフードパントリーは、食料配付に併せて相談会を開催することで、課題把握が困難な在住外国人が相談窓口に向くハードルを下げる取り組みになっています。また、相談を通じて、より多くの課題について把握する機会にもつながっていることを学びました。

研修の後半では、参加した各市区町村社協で実践している多文化共生に関する取り組みや課題について共有しました。また、共有した内容をもとに、「在住外国人支援に関する新たな企画」「多文化共生のための福祉教育プログラム」の二つのテーマについてグループワークを行い、「食を通じた交流」や「福祉教育

」など、様々な視点での多文化共生の支援についてアイデアを出すことができました。

言葉の壁や文化の違いなどから孤立しやすい在住外国人に対しては、課題が複雑化・深刻化する前に早期の支援やつながりが求められます。



本研修会を通して、今後社協に求められる役割としては、「民間団体としての柔軟性と地域ネットワークの強みを活かし、在住外国人に対する新たな切り口での関わり方を模索すること」が重要であると感じました。

さらに、社協職員が直接支援を行うだけでなく、地域の住民や団体が在住外国人も地域の一員として主体的に支援を展開できるように仕組みづくりや、多様な団体と連携した支援体制の構築を進めることも、今後の重要な使命・役割になると考えます。

(福岡市社協 平尾)

参加者からの感想

【多様な人や機関との連携を意識していく】

この度の研修では、豊島区民社会福祉協議会の取組みや地域の現状、そして在住外国人支援の重要性について深く学ぶことができました。地域に暮らす、すべての人が安心して生活できるためには、社協が『地域のハブ』として、多様な背景を持つ住民と行政・関係機関等をつなぐ役割を果たすことが改めて重要であると感じました。

印象に残ったのは、豊島区では在住外国人に向けた支援や取組みを積極的に進めている一方で、「在住外国人が地域で暮らすことが当たり前になつていく状況や、あえて問題として発信していいのか」というジレンマを抱えているという点です。「寝た子を起すな論」では

ありませんが、課題を提示することで差別を助長する可能性も懸念されており、地域の実情に応じた関わり方を考える貴重な機会となりました。

また、他市区町村社協の実践や取組みを通して、自分たちの活動に活かせる工夫やアプローチを学べたことも大きな収穫でした。今後は、在住外国人をはじめ、支援を必要とする人々に寄り添いながら、誰もが孤立しない地域づくりを努めていきたいと感じました。

(荻田町社協 秋山)

【増加する在住外国人と地域福祉のこれから】

今回の講義を通して、社会福祉協議会が「地域福祉の推進」を掲げる中で、これから各地域で確実に増えていく在住外国人への包括支援について、より現実的に考える機会となりました。私の勤務する市でも在住外国人の増加は明らかであり、その必要性を認識していたにもかかわらず、実際の取り組みが十分でなかったことを改めて実感しました。

特に、田中氏から紹介された豊島区の状況は印象的で、外国人比率が十二・七%と高いことが高齢化率の緩和につながっているという事実は、地域構造そのものに大きな影響を与えていること

を示しており、課題の大きさを再認識させられました。

言語や文化という大きな壁がある中で、豊島区民社会福祉協議会が他機関と連携し、在住外国人・地域住民・多様な専門職がつながりながら歩みを進めている姿には、強い学びと刺激を受けました。

さらに、交流会やサロンを通じて在住外国人が文化や伝統料理を紹介する機会づくりを行なっている点は、地域との相互理解に向けた展開として大変参考になり、ぜひ自地域でも取り入れていきたいと感じました。

(柳川市社協 堤)



〇〇らしさを引き出す！ 社協ワーカースキルアップ研修

- ☆とき 令和7年11月12日(水)
- ☆ところ クローバープラザ 501研修室
- ☆参加者 県内社協職員25名
社会福祉士実習生3名

昨年改定された、『社会福祉協議会基本要項二〇二五』では、これからの社会福祉協議会に求められる役割として、「誰もが安心して『その人らしい』暮らしができるよう、社協は支援が必要な人や支援が届いていない人を見逃すことなく受け止め、住民や地域の関係者とともに、継続的な支援を行う必要がある」と明記されています。

では、『その人らしい』暮らしとは、なんだろうか、社協職員は、地域住民の『その人らしさ』を引き出しているのかという考えから、本研修会を開催することに至りました。

講演①では、主任介護支援専門員として二十年のキャリアを持ち、地域では一人の活動者として公民館活動に尽力している藤原芳恵氏から、相談者や地域の活動者の『その人らしさ』を引き出す関わりについてご講演いただきました。

●講師が一番大事にしていることは、相談者が支援者を「自分をわかってくれる人」と認識してくれること。そのヒントは、相談者の「そうなんです！」という言葉を引き出すことができているか。聞き取る項目だけに注視してしまつては、相談者との信頼関係の構築はできない。言葉の情報だけではなく、自宅内の環境や飾つているもの、ごみ箱からも本人理解すなわち『その人らしさ』を深めるようにしているとのことでした。

●地域活動においては、災害時の地域防災を考えてくれる元市役所勤務の方や、仕事で使つていた紙の提供をしてくれる元出版社勤務の方など、たくさんの方の『らしさ』がつながり活動を実施できているとお話がありました。また「地域の一人の活動者として、たくさん地域住民の活動の場に顔を出して、接点を増やしていってほしい。」と社協への期待をお話いただきました。



講演②では、宮崎県三股町社会福祉協議会コミュニティデザイナーラボ 所長 松崎亮氏から『地域のらしさ』を活かしたこれまでの活動についてご報告いただきました。

●これまでであった縁やつながりが、現代は希薄化しており、その穴を埋めるために連携や包括的支援が必要とされてきているのではないか。新たな縁を作るために「場」(地域の居場所や子ども食堂など)が必要になつていると考えている。

●不登校生徒が多い実態から、居場所づくりを実施したが参加者が集まらな

かった。しかし、対象となる生徒たちは、地域のお祭りには参加していた。この気づきから、地域の活動拠点を巻き込んだ「よる学校」というイベント型の場づくりに挑戦し、「ひきこもり」「高齢者」などの目線となることで対象者が集まりにくいということを実感した。

●課題を抱えている人を生活者としてらえ、「好きなこと」「興味関心」を起点に関わっていくことで、「新たなつながり」や「主体性」を作り出していくのではないか。

最後には、同じ社協職員としてのエールがあり、創造的な地域づくりの面白さについてお話いただきました。

講演の合間には、日頃業務でかかわっている相談者や活動者をピックアップして、『その人らしさ』をもっと引き出していくための方法や、『地域らしさ』を活かす方法を考えるグループワークを行いました。

三股町社協が実施している「よる学校」のイベント会場は地域の学童の運動場を利用したり、高齢者がマージャンを教えるブースがあつたりと、町全体の『らしさ』がつながつた活動になつていると感じました。

研修を通して、信頼関係を構築したうえで、地域の生活者としての『その人らしさ』や、地域がこれまで作り上げてきた『地域らしさ』を引き出し、つないでいけるのが今後重要ではないかと考えました。

(朝倉市社協 池崎)

参加者からの感想

【私らしく、その人らしさを引き出すには?】

今回の研修では、『らしさ』といった視点を捉えることに苦戦しました。私が見たり思つたりしている『その人らしさ』は、一側面でしかないという思いが心にあつたからだと思えます。

ただ、藤原氏のお話を聞きながら、向かい合う自分が相手にとつて「話したい」と思える人であることが、素直な気持ちを引き出すことにつながっていくのかな、と理解を深めました。

発する一言の裏には、言葉にできない思いがたくさんあるかもしれない。その言葉を選ぶ理由や背景があるのかもしれない。だからこそ、丁寧な聴き方や、姿勢が重要なのだと実感しました。

様々な人との関わりの中で、憧れたり、あなりたいなど思ったりする瞬間はたくさんあるけれど、『らしさ』についてじっくり考えた時間のお陰か、自分では自分でいいのかなとも思っています。

人や地域に『らしさ』があるように、私らしく『その人らしさ』を引き出すことを、これからも考え続けられるワーカーでありたいと感じた研修でした。

(須恵町社協 合屋)

「研修での学びを糧に、自分らしい支援で頼られるワーカーを目指す」

今回の研修では、地域や個人の特性を活かした支援について学び、日々の業務でどう実践できるかを考える貴重な機会となりました。

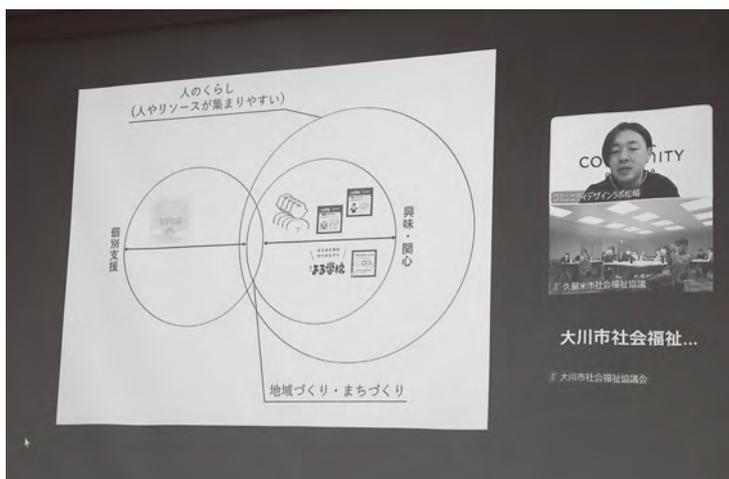
昨年四月に入職し、ボランティア担当として地域の皆さんと関わる中で、まだ気づけていない『その人らしさ』や『その地域らしさ』が多くあると感じました。同時に、『自分らしさ』は何か、日々の関わりの中で伝えられているのかを振り返るきっかけにもなりました。

藤原氏からは、相手の目を見てうなずくといった基本的な姿勢を意識することで、得られる情報量が増え、アセス

メントがしやすくなることを学びました。松崎氏からは、「支援のきっかけは何でもいい」という言葉が印象的で、本人の「気になる」を入口にすることが支援につながる新たな視点を頂きました。

また、地職連の研修に参加し、他の社協職員と情報交換することで多くの気づきを得ました。今後も積極的に研修に参加しながら学びを深め、地域の皆さんに頼ってもらえるワーカーを目指して、日々の支援に取り組んでいきます。

(新宮町社協 川津)



伴走型支援について考える研修会

～身寄りのない人を地域で支えるために
できることとは!?～

- ☆と き 令和8年1月14日(水)
- ☆ところ クローバープラザ 501研修室
- ☆参加者 県内社協職員49名

いのでしょうか。今までの課題解決型の支援に加え、伴走型支援の考えを学ぶことにヒントがあるのではないかと考え、本研修会を企画しました。

今回は、認定NPO法人抱樸理事長奥田知志氏を講師にお招きし、「伴走型支援」についてご講演いただきました。また、上記内容を実践する別府市社会福祉協議会 別府市成年後見支援センター次長 山口真寿美氏、同センター主任 矢野裕子氏に実践報告をいただきました。

●ガードレール型の支援

奥田氏より「その人が失敗しないようなガードレール型の支援をしていないだろうか。人には失敗する権利があり、失敗してもまた立ち上げられる。そのような支援の在り方が必要ではないだろうか。」というお話がありました。

支援者一人が常時伴走していくことは現実的に困難ではないかと思えます。自分の他にも誰かがつながっているという仕組みづくり、つまり地域の中で伴走できる体制を住民と共に構築することも我々社協の目指す伴走型支援なのかもしれません。

●家族機能の社会化

奥田氏より「家族機能とは、『気づきとつなぎ』である」というお話があり

少子高齢化や核家族化、単身化、それに伴う地域コミュニティの希薄化等の影響により、社会的孤立が問題となっています。

その背景には、今までの日本社会に根強く残っている「人様に迷惑をかけてはいけない」「自己責任論」等があり、「助けて」が言いづらい不寛容社会の一つの要因になっているのかもしれない。

果たして我々は、「家族機能を失い、地域から孤立した人々」とどのように社会的孤立問題に立ち向かっていけば良

ました。家族機能を失うことは、日頃一緒に生活をしているからこそその気づきが失われることにもつながります。抱撲では、その家族機能を赤の他人『なんちゃって家族』が担い合います。今回実践報告いただいた別府市社会福祉協議会の『べつぷ終活あんしんサポート事業』も家族機能の社会化の一つではないでしょうか。



● 相談は雑談から生まれる

別府市社会福祉協議会のお二方より「相談は雑談から生まれる」というお話がありました。『べつぷ終活あんしんサポート事業』でつながった相談者を地域のサークル活動につないだエピソードです。これは「特別な支援や事業から生まれたのではなく、移動中の車内の雑談の中から生まれた気づき」であると

もお話しがありました。

また、『伴走型支援』を切り口に、講演や実践報告を踏まえ、これからの地域づくりに必要な視点を中心に意見交換しました。

(大川市社協 野尻)

参加者からの感想

【伴走型支援について考える
研修会に参加して】

研修会に参加し、支援において最も大切なことは『その人を一人にしないこと』だと強く感じました。私たちはつい課題の解決を急ぎ、課題解決型の支援に偏りがちです。しかし、不安や迷いの中にいる人に寄り添い、同じ時間を共にし続ける姿勢こそが、伴走型支援の本質であることを改めて学びました。

後半の別府市社会福祉協議会の報告では、早い段階から「老い」に備え、安心して生活できるよう、相談体制の整備や地域資源との連携を進めている取り組みが大変参考になりました。家族機能の代替が求められる状況の中で、法人後見制度や新日常生活自立支援事業が協議されている現状も踏まえ、地域の実情に応じた支援体制づくりの重要性を実感しました。

人となりを理解し、地域も制度も熟知している社協だからこそ実現できる、終身型の寄り添い支援が求められていると思います。今回の学びを活かし、そのような支援を担えるワーカーを目指していきたいと思っています。

(みやま市社協 吉山)

【日頃の業務からつながりを
意識して取り組む】

奥田氏からは、伴走型支援の目的・価値はつながり続けること、他者とのつながりが無ければ、対象者も困りごとの自己認知できないなど、つながることの重要性についてのお話をいただきました。

また、別府市社会福祉協議会からは、終活あんしんサポート事業や民間企業と連携した見守り活動の展開や終活事業利用者地域同好会につないだ事例など、社協だからこそ様々な資源とのつながりを活かした関わりができたことについてのお話をいただきました。

現在、私自身は伴走型支援を通じた対象者とのつながりづくりを直接行う機会はありません。しかし、日頃から住民や関係機関とのつながりを意識して関わっていきたいと思っています。

そうすることで、他の職員が支援に困った時に、つなげる手助けをするといったサポートを通じ、誰かに寄り添う支援の一助になりたいと考えました。

(北九州市社協 前田)



【解決だけではない
支援の総合的価値について】

今回は、伴走型支援に対する自身の捉え方を深く考え、新たな気づきを得るきっかけとなりました。

これまででは、問題解決に至るまでの相談支援を『手段』として捉えていたことで、相談中に言葉に詰まるが多々ありました。しかし、講師の奥田氏による

「解決という言葉には広い意味がある」という言葉を聞いて、解決という結論にのみ価値を見出すのではなく、問題解決に至るまでに相談者と交わした対話にも価値があると考えることができるようになり、「つながり続ける過程」の大切さを学ぶことができました。

また、「伴走型支援は成果が見えにくい」という言葉について、支援者による決めつけの解決を急ぐのではなく、つながり続ける過程の積み重ねを成果と捉えるという考え方にハッとしました。

今後は、解決するという成果・結果にこだわり過ぎず、相談者とながら続ける時間を価値あるものにできるように相談に向き合っていきたいと思います。

(筑前町社協 宮原)



社協カフェ

～悩める社協職員の集い～

☆と き 令和8年1月30日(金)
 ☆ところ クローバープラザ
 セミナールームB
 ☆参加者 県内社協職員29名

本研修会は、社協職員の新たな出会いや顔の見える関係づくり、意見交換を通して、横のつながりをつくることを目的に開催しました。

社協歴が少し上のちよつと先輩として、嘉麻市社会福祉協議会 総合相談・地域づくり推進係 角ちひろ氏、大野城市社会福祉協議会 地域課 石本明日香氏を講師にお招きし、日々の業務の中で経験から大切に行っていることや意識していることなどをお話しいただきました。

嘉麻市社会福祉協議会 角氏

● 個別支援の経験を通して、相談者の人生で「失敗する経験」を奪っていないか。

● 仕事をするうえで、時間の使い方、物事の本質をとらえること、自分の職務把握と言語化を意識している。過去の経験から、職務での当たり前を怠ると、相談者の不利益や不信感につながると実感した。

● 「あなた」を必要としている人がいて、「あなた」にしかできない支援があるはず。

大野城市社会福祉協議会 石本氏

● 社協事業の福祉教育は、子どもから大人へ「ふくしの種まき」を行う機会であり、地域の強みをつなげる場となる。社協は、コーディネート(つなぐ)の役割。

● 小学生への福祉教育では、地域で活躍をしているボランティアさんに参加をしてもらい、お互いの刺激になった。

● 社協で働くうえで、とにかく話して会ってみる「つながり」、話した内容を見える化をした「伝え方」、これまでに囚われない「頭をやわらかくすること」を大切にしている。

今回は参加者同士が広く交流できるように、グループワークをテーマ別で三回実施しました。若手職員ならではの意見を交換する中で、「社協の魅力」や「地域活動で大切なこと」などの気づきが多くありました。

本研修は分科会実行委員が、とにかく社協歴の近い職員同士でリラックスして交流できたという思いで、企画しました。休憩や昼食時には、参加者が所属する社協や業務内容以外の話題で盛り上がりつつある一幕もあり、楽しい交流の場になっていたことが印象的でした。

本研修会をきっかけにできた、若手職員の横のつながりがよりよい地域福祉につながるように願っております。

(粕屋町社協 宮口)



左上から時計回りに、分科会実行委員の嘉麻市社協 吉田氏、粕屋町社協 宮口氏、講師の大野城市社協 石本氏、分科会実行委員の久留米市社協 田中氏、講師の嘉麻市社協 角氏

【社協の魅力を考える】

私は今回、分科会委員として企画段階から参加しました。分科会委員に立候補した理由は、単純におもしろそうだったからです。他市区町村社協職員と一緒に企画するという経験はなかなかできないですし、テーマも自由だったので、やってみたいと思いました。

私が今回、メインで担当したのは「あなたなら社協を知らない人にどう伝えますか？」をテーマにしたグループワークです。私は最初、「社協って何をしているところ？」と聞かれた時に、具体的に分かりやすく説明することができませんでした。社協は様々な役割を担っていて、魅力はたくさんあるにもかかわらず、伝えられなかったことにもどかしさを感じました。同じような経験のある職員が他にもいるはずと思い、グループワークを企画しました。

グループワークではそれぞれが思う「社協のいいところ」を聞くことができ、共感することもあれば、他のワーカーの意見を聞いて初めて気づかされたこともありました。

次に「ちょっと先輩の話」とそれに続くグループワークでは、皆さんの仕事への思いや気がけていること、「どのよう

な人が頼られる人か」などについて意見交換しました。

今回の研修で私が感じたことは、社協(自分の職場)を好きな人が多いということ。社協のいいところを聞くのと、とてもたくさん意見が出てきました。また、「どのような人が頼られるか」についても、自分の職場の職員を例として挙げる人が多くいました。

身近なことをテーマに意見交換したことで、他市区町村社協の方々とフラッシュに交流できたと思います。また、研修に企画段階から参加したことで、他市区町村社協の方々とより知ることができ、気軽に相談ができるような関係になれたと思っています。

今回の研修でできたつながりと学びを今後の業務に活かしていきたいと思っています。

(久留米市社協 田中)

【社会福祉協議会が地域支援を行う意義と役割について】

今回は、社会福祉協議会が地域支援を行う意義や役割とは何か、深く考えるきっかけになりました。地域住民の生活の質の向上と誰もが安心して暮らすことのできる地域づくりを推進するためには、石本氏の講話であった「既存の

制度や枠組みに囚われない状況に際して対応する柔軟性」を持つ必要性を再認識しました。今後、社会福祉協議会は新たな社会資源の発掘や、他機関との連携、コーディネートを行うといった役割を果たすことがますます求められてくると感じました。

また、制度や事業といった型に無理に当てはめるのではなく、個別化した支援を積み重ね、その実践を地域全体に普及させていくことが重要であると考えました。日々の業務を振り返り、目の前の対応に追われるだけでなく「つながる・よりそう・これからも」という軸を大切にしながら信頼関係を構築し、小さな変化にも「気づく」視点を持って住民主体の伴走型支援の実践を目指していきたいです。

(大野城市社協 高本)

【地域で頼られるワーカーを 目指して】

グループワークでは「地域で頼られるワーカー」についてさまざまな意見が挙げられ学びになりました。私はそのなかで「地域に詳しいこと」を考えました。その地域にある社会資源を熟知していることや実際に必要としている人につながる、活用ができること、または人脈や顔の広さも重要と感じました。社協経験が浅い私としては、まずは地域の社

会資源について知ること、そして社会資源の活用や連携・協働が実現できるよう地域の方との関係構築を進めたいと思います。

先輩ワーカーのお二人からは、仕事で意識していることなどをお話しいただきました。異なる考え方の部分もありましたが、共通しているのは必ず軸に「地域のため」を第一に考え、熱意を持って取り組まれていることでした。

今回の研修をただ楽しかったで終わらせることなく、他市区町村の社協職員との関係構築や、グループワークを通して学んだことを活かし、地域で頼られるワーカーを目指していきたいと思っています。

(小都市社協 土井)



令和8年度総会・研修会のご案内

▼日 時／令和8年5月29日(金)

▼会 場／久留米市総合福祉センター 2階大会議室

▼タイムスケジュール(予定)(変更する可能性がございます)

- 11時～12時 総会 (議案) ・令和7年度事業報告及び収支決算報告について
 ・任期満了に伴う、会長および幹事の選任について
 ・令和8年度事業計画(案)及び収支予算(案)について
 ・その他、連絡事項

13時15分～16時30分 研修会

「社協Reboot～非常時に備えた社協経営と地域づくり、できていますか?」(仮)

▼講 師／大崎市社会福祉協議会 事務局次長兼総務福祉部長 加藤 大介 氏

いつなが起こるか分からない非常時に備えて、ワーカー一人ひとりが、地域福祉推進や経営基盤など、「これから本当に必要な視点はいったい何か」を、中長期的な展望を視野に入れて今の社協を考えることを目的に企画しています。

▼申込方法／後日、案内文書発送と、ホームページに掲載いたします。

「まなこ」100号について

本会発足当初から、社協ワーカーとしての思考・視点で書いてきた会報「まなこ」が、昭和49年4月の第1号から数えて、次号で100号を迎えます。

本会現役員で協議・検討した結果、節目である100号を記念し、県内市区町村社協および職員からの記事を集約したいと考えております。

ご多忙のところ恐れ入りますが、ご理解とご協力の程、お願い申し上げます。

(県内市区町村社協への依頼)

・貴会が日頃の役割を果たす中で、大事にしている「まなこ」を記入し提出

(県内市区町村社協 地域福祉担当者への依頼)

・貴会職員が日頃の役割を果たす中で、大事にしている「まなこ」を記入し提出

※こちらは強制ではなく任意です。希望される職員からのお返事をお待ちしております。

(提出方法)

提出方法は、案内文書および本会ホームページに掲載しております。

令和8年4月13日(月)までに、事務局へご提出・ご返送をお願いいたします。

(注意事項)

※ご返送がない場合は、本会幹事よりご連絡させていただきますので、あらかじめご了承ください。

※県内社協職員からの提出は30名を目標としております。ぜひ多くのご希望とご提出をお待ちしております。

※ご不明な点等ございましたら、事務局までご連絡をお願いいたします。

発行者 福岡県地域福祉活動職員連絡会

事務局 〒830-0027 福岡県久留米市長門石 1-1-34

久留米市社会福祉協議会 担当：荒木

TEL：0942-34-3035

FAX：0942-34-3090

Mail：yarak@heartful-volunteer.net

H P：http://f-chishokuren.org/



▲HPはこちら

分科会研修「社協カフェ」では、社協職員同士で研修を企画させていただきました。大変貴重な経験となりました。打合せを重ねる度に、徐々に形になっていくのを感じ、楽しみになっていました。参加者の社協職員としての熱い思いを感じました。今後も地職連の研修で職員同士のつながりができれば嬉しくです。(N・M)

編集後記

